

主 題：女性のかぶり物

聖書箇所：コリント人への手紙第一 11章2-7節

パウロはコリント教会の兄弟姉妹に主のみこころに沿って生きることを命じました。それ以外の方法で神の栄光を現すこと、神を喜ばせることはできません。そして、私たちの主イエス・キリストを見上げるときに、まさに、主ご自身がそのような歩みをこの地上でなさったのです。すべての点において父なる神に喜ばれていました。すべての点において父なる神の栄光を現していました。だから、あなたがたもそのように生きるのだ、私たちはそのように生きていくのだとパウロは教えるのです。

その上で、教会の中に存在していた別の問題についてパウロは教えを始めるのです。その問題は「教会内でのかぶり物」についてでした。ある女性たちが「かぶり物」をしないで奉仕をしていたと聖書は教えています。いったい、なぜ、それが問題なのでしょう？実は、これも私たちが学んで来たように、「主のみこころに沿って生きること」を教えているのです。かぶり物をしないことは主への服従に対してそれに背く行動だったからです。「かぶり物」を着けないことが主のみこころに沿って生きることではなかったし、また、主のみこころに服従することでもなかったのです。彼らの問題は「神のみこころに従うよりも自分たちの考えに従って歩んでいること」でした。聖書が何と教えようと、神が何と言われようと、私たちは自分のやりたいことをする。自分が考えてしたいことをしている、そこに問題があったのです。

結局はすべての問題はそこに繋がっているのです。これまでも見たように、Iコリント10：24に「だれでも、自分の利益を求めないで、他人の利益を心がけなさい。」と、パウロが教えたことを思い出してください。私たちの問題は、私たちの焦点がすべて自分に当たっていることです。すべての中心は自分なのです。自分の思うように生きていきたい、自分の願いが叶えられること、そのことしか考えていないのです。でも、救いに与った私たちは自分ではなく神が喜ばれることは何かを考えて生きていくし、また、自分よりも周りの兄弟姉妹たちの信仰が成長することを願いながら、そのために喜んで自分をささげていこうとします。みことばが教えるように「…心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。…あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ…」と、まさに、この命令の実践なのです。

ですから、このコリント教会の中に、悲しいことに、ある女性たちは自分たちの目を自分たちにだけ向けたのです。自分たちの考えに沿って歩んでいこうとするのです。そこでパウロは、それがいかに間違っているのかを教えます。「かぶり物」についてのパウロの教えを見ていきますが16節まで見ることはできませんが、少なくとも、この教えから学ぶことがいくつかあります。結論を言うなら、かぶり物を着けるか着けないか、そのことが大切なのではなく、もっと大切なことは神のみこころに従うかどうかです。そのことをしっかり頭に入れながらパウロの教えを見ていきましょう。

先ず、パウロは2節でコリント教会を誉めることから始めています。11：2「さて、あなたがたは、何かにつけて私を覚え、また、私があなたがたに伝えたものを、伝えられたとおりに堅く守っているの、私はあなたがたをほめたいと思います。」、彼らに対する称賛です。その理由が二つ書かれています。

◎パウロがコリント教会を称賛した理由

1. **パウロのことを覚えていたこと** : パウロは1年半このコリントの町で過ごしました。その間、パウロは伝道し福音を伝え、そして、救いに与った者たちを成長へと導いた、弟子作りをしたのです。ですから、人々はパウロのことをよく覚えていました。パウロが町を去った後も彼らはパウロのことをずっと覚えていたのです。そのことをパウロは喜び、そして、彼らのことを誉めるのです。

2. **教えられた神の真理を伝えられた通りに堅く守っていること** : パウロが彼らに伝えたことは「彼の教え」のことです。そして、その教えをコリントの人たちは教えられた通りに堅く守っている、しっかりと保っている、その教えから外れることなくその上にしっかりと立っていると言うのです。そのことをパウロは覚えて彼らを誉めるのです。パウロから語られた神の真理を教えられた通りに彼らは堅く守っていたと。もちろん、私たちがすでに学んで来たように、自分勝手な解釈をしているところもありました。でも、このパウロの彼らへの称賛を見るとこの教会の人たちはパウロから教えられたことをしっかりと守っていたのです。

ここまで見て、皆さん不思議に思いませんか？もし、この通りならコリント教会はすばらしい模範的な教会だったと言ってもおかしくないはずです。パウロは神の真理を教えたわけで彼らはそれをしっかり覚えていたのです。ところが皆さんもご存じのように、この教会は大変世的な教会でした。そのよう

な不名誉なレッテルが貼られています。何が起こったのでしょうか？神の真理を聞いてそれをしっかり保っていた彼らですが、それなのに彼らの信仰は成長していなかったのです。彼らはまだ世的だったのです。私たちが何度も学んでいるように、どれだけ真理を知っていても、それをしっかり握っていても、頭の中にしっかり記憶していたとしても、それを実行することがなければ、日々の生活にそれを生かすことがなければ絶対に霊的に成長しないということです。そのことを私たちは繰り返して見ているのです。多く人はみことばを知っています。聞いたことがあるし憶えているし、ノートにも書いたし、聖書にもメモをしてある。でも、大切なことはそうではありません。大切なことはそれに基づいて生きているかどうかです。成長するためには真理を聞くだけでなく、真理を実践することが必要です。ですから、コリント教会を見たときに大変悲しい例がここに記されているのです。悪い例です。みことばを知っていてもそれに生きなかつた人たちです。私たちにはそのようなことがあってはなりません。

さて、彼らへの称賛を記した後に問題の本題へと入っていきます。

★コリント教会に存在した問題の解決を示していく

3節「しかし、あなたがたに次のことを知っていただきたいのです。…」と、パウロがこのように語ったのはこの教会に存在していた問題を彼はよく知っていたからです。それを知った上でパウロは「これから私はあなたがたが考えなければいけないこと、学ばなければいけないこと、あなたがたが変わらなければいけないことを教える。」とその教えを始めていくのです。

A. 神の定めた関係 3節

神が定めた三つの関係について話しをします。「男とキリスト」の関係、「男と女」の関係、そして、「キリストと神」との関係です。3節には続いてこう書かれています。「…すべての男のかしらはキリストであり、女のかしらは男であり、キリストのかしらは神です。」、ここには「かしら」ということばが繰り返されています。このことばは新約聖書中に75回出て来ます。文字通りには「頭、かしら」ですが、比喩的には「首長」という意味です。ある集団や団体を支配する責任者、統率者です。人間関係における「首長」、そのことを教えるのです。ある神学者はこれを「支配、権威」と訳しています。ここでパウロが言ったことは神と人間との間に、男と女との間に、つまり、家族において神が定められた関係が存在するという事です。それを見ていくのですが、どのような関係か？ここに共通している関係は「支配と従属」の関係、「上位と下位」の関係、「上官と家令・部下」の関係という縦の関係です。

1. すべての男のかしらはキリストであり

パウロはこの後教えていきますが、すべての男性は創造主なる神に対して責任があると言います。被造物であるものたちは創造主に対して責任があるのです。なぜ、敢えて「男」と書かれているか？神の創造を見た時に、最初に神がお造りになった人間は「男」だったからです。女ではなかったのです。ですから、すべての男はこのかしらであるキリスト、神に対して責任があるということを使うのです。

1) 救われた者

皆さんはイエス・キリストを信じて救いに与かった者たちの、つまり、クリスチャンである私たちのかしら、首長はだれなのか、だれに従うのか？そのことはもうご存知ですね。私たちはキリストに、神に従うのです。なぜなら、「また、御子はそのからだである教会のかしらです。」(コロサイ1:18)と言っています。「御子」、つまり、イエスはそのからだである教会、つまり、イエスを信じる者たちの、クリスチャンたちのかしらだということです。ですから、当然イエス・キリストの救いに与ったひとり一人、救われている者たちはみなこのかしらであるキリストに従う者だと言うのです。

皆さんにぜひ覚えていただきたいことは、実は、クリスチャンとは、そういう人へと生まれ変わった者たちだということです。つまり、クリスチャンというのは「神に従う者」へと生まれ変わったのです。ペテロはそのことについて1ペテロ1:2で「父なる神の予知に従い、御霊の聖めによって、イエス・キリストに従うように、またその血の注ぎかけを受けるように選ばれた人々へ。…」と言っています。「父なる神の予知に従い、」、あなたが神を選んだのではない、神があなたのことを選んでくださっていたのです。「御霊の聖めによって、」、あなたが自分で一生懸命努力をして罪から聖められたのではない、聖霊なる神があなたを聖めてくださった、罪から聖めてくださったと言います。その「聖めによって、イエス・キリストに従うように」と選ばれたのです。私たちはイエス・キリストに従う者として神が選んでくださり、神が救ってくださり、そして、生まれ変わったのです。

また、ヨハネもこう言っています。ヨハネ3:36「御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることなく、神の怒りがその上にとどまる。」と。注意して見てください。「御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、」と、その後、「御子に聞き従わない者は、いのちを見ることなく、神の怒りがその上にとどまる。」と、ここには「信じる者」と「聞き従う者」とが同意語で使われていることに気付かれませんか？このみことばが言っていることは、もし、あなたが御子を信じるなら永遠のいのち

ちを得る。もし、あなたが御子に聞き従うのであればいのちを得ると。「信じる」ということと「この方に聞き従っていく」ということが確かに同意語としてみことばは教えているのです。

ということは、救われた私たちはイエスに従う者として生まれ変わったのです。私たちはイエス・キリストに逆らって来た者です。そんな私たちは自分の罪に気付かされて、そして、神の前に罪を悔い改めて「神さま、あなたに従います」とそのようにイエスを受け入れる決心、そのように信じる決心へと導かれたのです。その決心によって私たちは新しく生まれ変わるわけです。ですから、救いに与った私たち、特に、ここでは男のことを言うのですが、私たち一人ひとりが私たちを造ってくださった神に従うのは当然のことです。この方は私たちの「かしら」だからです。この方は私たちの「首長」だからです。この方は私たちの「主」であられるからです。

2) 救いを拒んでいるもの

では、救われていない人はどうなるのか？彼らも同じ責任を持っています。なぜなら、彼らも同じようにこの創造主によって造られたからです。信じていない男性にとってもキリストはかしらです。問題は、彼らはこの創造主なる神に対する服従の責任を無視して、この方に逆らうという罪を犯しているということです。悔い改めてこの方信じこの方に従う選択をすることです。

ですから、先ずパウロが言うことは、最初の関係、「男とキリストとの関係」、それは「この方に従う」ということ、その責任が私たちにはあるということです。

2. 女のかしらは男であり

これを見ると皆さんは疑問に思われるかもしれません。なぜ女性のかしらは主ではないのか、なぜ男なのか？と。男性に従えば主に従わなくても良いのか？もちろん、あなたに与えられた責任は「主に従うこと」であるのは当然です。すべての被造物が創造主に従うというのは当然の責任です。ですから、女性にも主に従うという責任があることは明らかです。パウロがここで言わんとしていることは、確かに「主に従うこと」はその通りですが、特に、教会や家庭において、女性には男性のリーダーシップに従うという責任があるということを知っているのです。ですから「女性のかしらは男だ」と言う時に、女性にはその立てられたリーダーである男性たちに、家庭であれば夫である男性に従うという責任があるということを知っているのです。

3. キリストのかしらは神です

こうして見ると「キリストは神よりも劣るのか？」と、そうではありません。イエスはヨハネ10:30でも「わたしと父とは一つです。」と言われ、ご自分がいったいだれなのかを明らかになされたのです。ご自分と父なる神は全く同じだ、つまり、イエスご自身が神であることを明らかになされたのです。イエスは永遠の昔から永遠の未来に至る迄神であられるお方です。そのことが変わることはありません。イエスが人としてこの地上にお見えになったとき、彼は神でなくなったのか？いいえ、彼は神であり続けました。このお方は永遠から永遠に至るまで常に神であられるお方です。しかし、今話したように、イエスがこの地上にお見えになった時に、彼は人として父なる神に従うというその模範的な生き方を私たちに示してくださったのです。ですから、イエスが人としてこの世にお見えになっても、彼は神であり、そして、人として父なる神に従うという、私たちが歩むべき歩み方を示してくださったのです。

ある人はもしかするとこのようなことを聞いて、「すると、父なる神がいて、イエスがいて…では、神はふたりなのか？」とそのような疑問を抱かれるかもしれませんが、そうではありません。神はおひとりです。聖書が教えている神は「父なる神がいて、子なる神イエスがいて、聖霊なる神がいる」、三人いるようで実はひとりの神であるということです。確かに、あなたや私の頭では理解できないことです。でも、これが聖書が教えている唯一真の神だということです。

こうしてパウロは神がお定めになったこの三つの関係を明らかにした上で、それぞれに与えられた「従順という責任」に忠実であることの大切さを改めて教えたのです。今見て来たように、男性たちはかしらである主に従順、忠実であるように。女性たちもその上に立つ権威ある男性たち、夫たちに従順であるように。ちょうど、イエスが人としてこの世に来られたときに父なる神に従順であられたように、そのように教えるのです。

パウロが敢えてこのようなことをここで教えているのは、この教会の中にこういうことを受け入れていなかった者たちがいたからです。男女平等ではないのですか？私たちは男性と同じことをしてはいけないのですか？なぜ従う必要があるのですか？と。そのように彼らは考えて、そして、彼らはある行動によってそれを明らかにしたのです。それは何かというと、教会の中で働きをする時にかぶり物を着けなかったということです。

ここで私たちが覚えておかなければいけないのは、皆さん、罪というのは祝福を絶対にもたらさないということです。というのは、罪は私たちのうちに何を為そうとするのか、何を達成しようとするかと言うと、私たちが神のみこころに逆らうようにと働くことです。神が「しなさい」ということに対して、

私たちがそのことをしたくないことであればそれに従おうとはしない、それに逆らうようにと働くのです。それは皆さんも日々経験なさることです。悲しいことに、この教会の中において存在していた罪、それが家庭においても、また、教会においても悪い影響をもたらしていたということです。

そこでパウロはこの問題の核心に触れて行こうとするのです。そのことが4節から記されているのですが、その説明をする前に、今、私たちはこの「かしら」が「支配、首長」であると説明をしましたが、同時に、このことばには「起源、源」という意味もあります。その解釈に沿って説明をされる方もいます。私がおんなのような説明をしなかったのは、この文脈を見る時にこの箇所が教えているのは「首長」である、その意味でこのことばは使われていると確信したからです。

B. 神の定めた関係の実践 4-6節

1. 男性はかぶり物を着けない 4節

4節「男が、祈りや預言をするとき、…」と教会の中での働きが記されています。「祈り」と「預言」、もちろん、これだけではなかったのですが、敢えて、この二つが記されています。

「祈り」 : 神の前に人々のとりなしをすることです。

「預言」 : 神の真理を人々に伝えることです。神のメッセージを伝えるのです。

ですから、パウロが言うことは「かぶり物」を着けるかどうかということではないのです。というのは、後で説明しますが、この当時の女性たちはみなかぶり物を着けていたのです。パウロが言うことは、この「祈り」や「預言」の働きをするときに女性がかぶり物を着けるのかどうかということです。それを見ていきますが、その前に「かぶり物」とはいったい何かを知る必要があります。これは簡単に言えば「ベール」です。パークレーはそのことについてこのような説明を与えています。「パウロの時代には東洋のベールはもっと厳しく空いているのは目の部分だけで、後は頭からつま先まですっかり覆いかぶさっていた。」と。今でもそのような人はいます。「かぶり物」とはそのような人のことを言う。

また、ウィリアム・ラムゼイ卿というスコットランドの考古学学者であり、また、新約聖書学者ですが、彼はこんな説明をします。「東洋ではベールは女の力と名誉と尊厳である。頭にベールを被ることにより女はどこにでも安全に行くことができ、深い尊敬を払われるのである。」と。ですから、彼らが外に行く時にはベールを被ったわけです。それによって彼らは町に出て行くことができたのです。しかも安全に出て行くことができたのです。「ベールを被って出て行った場合、その女を暴行したり悩ましたりするような行動をとる男は、東洋では酷い目に会うしいのちも落としかねないのである。彼らを守らなければいけない。」と。

なぜ、こんなことが為されていたのかと言うと、それは女性の人権が認められていない時代だったから、そういう地域だったからです。女性は物のように扱われていたのです。当時のそういう社会にあって、ベールで自分たちを覆うことによって彼らは自分を守ることができたのです。このことを私たちはしっかり頭に入れておかなければいけません。というのは、この手紙を私たちが見る時、これだけではありませんが、時宜的には今から二千年前の人々に記されているからです。「かぶり物」が何か分かりました。その当時、女性たちが身に付けていたベールでした。

4節の続きを見てください。「…頭にかぶり物を着けていたら、自分の頭をはずかしめることになります。」と、もし、男性が「祈り」や「預言」の働きをする時にベールを頭に着けていたなら、それは自分の頭をはずかしめることになると言うのです。男性が「私は神の主権のもとにあり、この神に従っているのです。」と、そのことを証するためには「主の教えに従うこと」が必要です。この件に関して「祈り」や「預言」という奉仕をする際にかぶり物をしてはいけないというのが神の教えです。ですから、それに逆らってかぶり物をするのなら自分の頭をはずかしめることになると言います。どうしてこのことが自分のかしら、自分の頭、つまり、主をはずかしめることになるのか？この「はずかしめる」とは「侮辱する、名誉を汚す」という意味です。主の教えに逆らうなら、私たちは神の栄光を現すことなどできません。却って、その罪によって神を汚し、神をはずかしめることになるのです。そのことをパウロは言うのです。

もし、あなたが主の主権に、主の權威に従っているのなら、その許にあって行動しているなら、神が言われるように、頭にかぶり物を着けてはいけないと。着けていなければあなたは「私は主の主権のもとにある。私は主に従っている。」と、その証を為すと言うのです。だから、もしあなたがかぶり物を着けるなら、あなたは神の教えに逆らうわけで、それは主に恥をもたらすことになる、主の名誉を汚すことになると言います。もう一つの理由は、自分自身にも恥をもたらすことになるのです。なぜなら、ベールを着けるのは女性だけだからです。

2. 女性がかぶり物を着ける 5-6節

5節「しかし、女が、祈りや預言をするとき、頭にかぶり物を着けていなかったら、自分の頭をはずかしめることになります。それは髪をそっているのと全く同じことだからです。」、何度も繰り返して皆さんに言わなけ

ればいけないことですが、あくまでこれは、パウロがこの当時コリント周辺の町に存在した習慣のことを話しているということです。このように当時の人は生きていたのです。そのことをしっかり覚えて私たちはみことばを見ることが必要です。パウロはこう言います。もし、女性がかぶり物をするのであれば、その行為が意味することは「私は主の権威の下にあるのです。私は主の言われることに従っているのです。それとともに、私は夫の権威に従う者なのです。」です。ですから、かぶり物とは「服従や下位を象徴するもの」だったのです。「自分は仕える者であって仕えられる者ではありません、自分は首長ではありません、私は仕えるのです。」ということをはっきりと明かにするのです。それがかぶり物を着けることだったのです。

先ほどから、女性が下位であると話していますが、誤解していただきたいくないのは、それは男性に比べて劣っているということではありません。能力において知力や霊性さ、また、信仰の成熟度において男性よりも夫よりも優れている女性はたくさんいます。私の神学校の時に、既婚者はクラスに妻を連れて来ることができたのです。彼女たちも例えばヘブライ語やギリシャ語などのテストを受けることができました。おもしろかったのは、夫よりも妻の方が点数が良かったりすることもあるのです。ですから、「下位」と言ったときに女性が劣っているということを言っているのではないのです。それぞれには託された責任がある、異なった役割があるということを言っているのです。

パウロは言います。もし、女性がかぶり物をしなければ自分の頭をはずかしめることになる。先に男性のところで見たように、もし、**かぶり物をしなければ**

(1) **それは主のみこころに反すること** : 男性と同じように、まず、自分のかしらである神をはずかしめることになるのです。

(2) **それは町の罪人と同じこと** : みことばはそこで終わっていません。「それは」と続きます。「それは髪をそっているのと全く同じことだからです。」と。パウロが言うことは、もし、あなたがかぶり物を着けずに働きをするのなら、それはまさにコリントの町に住んでいる多くの罪人の女性たちと同じことだということです。5節には「髪をそっている」という表現があります。6節には「髪を切る、頭をそる」という女性のことが書かれています。パウロは思い付きで書いたものではありません。このような人たちがコリントの町にいたからです。彼らは何だったのか、何をしていたのか？彼らは売春婦だったのです。このコリントの町にはアフロディト神殿がありました。そこには千人の売春婦たちがいたと言うのです。まさに彼らはそういう髪型だったのです。先ほど話したラムゼイ卿はベールについてこのように言っています。「ベールなしの女は無に等しい存在であって、だれでも彼女を侮辱してもよいのである。」、先ほど見たように、もし女性がベールで自分を覆っているなら守られていたけれど、もし、女性がベールを着けていないとしたら、彼女は無に等しい存在でだれでも彼女を侮辱しても良いと言うのです。

ですから、パウロが言っていることは、もし女性がかぶり物を着けていないなら、それは、主をはずかしめることであるとともに、あなたの夫をはずかしめることになるということです。彼らはそのように存在した売春婦たちと同じ格好をするのです。同じような髪型をするのです。そうすると、いろんな悲しい評判が立つわけです。だから、その夫たちをはずかしめることになる。

先ほどから、女性たちがベールを着けずに奉仕をするということを話していますが、この人たちは何が問題だったのでしょうか？なぜ、そういうことを選択しようとしていたのか？彼らは男性と同じようになろうとしていたのです。今日は見ることはできませんが、女性には長い髪があるのです。基本的にその当時の女性は長い髪をし、男性は短い髪の毛をしていました。だから、彼らは髪を切って、男性と同じようになろうとした、それが目的だったのです。だから、彼らの言い分というのは「私たち男女は平等なのでしょう。なぜ男性は教会で奉仕をする時にかぶり物をしないのか。なぜ私たちだけしなければいけないのか。私たちも同じでいいではないか。男性と同じようになりたい。」でした。

このようなことがこの教会の中で行われていたのです。そこでパウロが言うのは「ベールを着けなさい」、なぜなら、ベールはまさに「服従のしるし」だからです。ですから、女性が教会の中でベールを着けて、そして、奉仕をするなら、それは「私は喜んで男性のリーダーシップに、また、家庭で自分の夫に従っています。」ということを表しているのです。「主への服従」という行為をこのかぶり物を着けることによって明らかにしていたのです。私はこんな思いを持って歩んでいるのですと、そのことをこのかぶり物が明らかにしたのです。「私は私に与えられたこの権威に従う者です。教会にあっても家庭にあっても…」と。

残念ながら、このようなことがこのコリントの教会で起こっていた出来事だったのです。繰り返しになりますが、皆さん、確かに、男女平等です。この後パウロが教えてくれます。どちらも神の前に尊い者です。今私たちはこのレッスンを通してどちらが偉いのか偉くないのかということを行っているのではないことは皆さんお分かりになったでしょう。このみことばが私たちに教えてくれていることは、それぞれに異なった役割があるということです。男性には男性の、女性には女性の役割が与えられている

のです。その約束を全く無視して自分勝手に歩み始めるなら、そこには必ず問題が生じて来ます。

この女性たちの問題、それは「私たちは自分の思い通りに生きていきたい、邪魔されたくありません。そういう教えがあるかもしれないけれど私はどうでもいい。私は自分の思う通りに生きていく。」と、このような歩みが為されていたのです。

よく考えてみると、サタンはどんな時代でもどんな場所でも同じように神のみこころに逆らうようにとクリスチャンに働きます。イエスを信じていない人のうちに働いて、決してこの救いを受け入れないようにと導きます。イエスを信じたなら今度は神に従わないようにと誘惑します。例えば、夫婦間の問題を考えると、このことは神がアダムとエバをお造りになったその時から問題が起こるということを知った上で、そのことをちゃんと教えておられます。創世記3：16、二人が罪を犯した後のことです。エデンの園を追放される前のこと、「女にはこう仰せられた。「わたしは、あなたのうめきと苦しみを大いに増す。あなたは、苦しんで子を産まなければならない。」、出産のときの苦しみのことです。罪によってそれが増したと言われています。その後「しかも、あなたは夫を恋い慕うが、彼は、あなたを支配することになる。」、問題は「恋い慕う」ということです。何となくこれは、夫を恋い慕うのに夫はそれに答えられないかのように見て取れるのですが、このことばは「夫に対する妻の願望」という意味です。つまり、妻が自分の願いに夫にさせようとするということ。その後「彼は、あなたを支配するようになる」とあります。何が起きているのかお分かりになりますか？夫婦の間でどちらが相手を支配するのか、その争いが生じると言うことです。男性が支配する、いや女性が支配する、そのような争いが夫婦の間で起こって来ると言うのです。アダムとエバをこのエデンの園から追放する前に神はこのことを言われたのです。そして、そのことが現実になっているのです。家庭においての一番の問題はそういうところにあるのです。だれがリーダーなのかです。

ですから、パウロはこうしてコリントの教会の人々に対して、神の前に正しいことをするようにと教えるのです。もし、服従することに抵抗があるのなら、それは神の前に罪だということ。そして、その罪を悔い改めて主に従うようにと促すのです。6節「女がかぶり物を着けないのなら、髪も切ってしまうなさい。髪を切り、頭をそることが女として恥ずかしいことなら、かぶり物を着けなさい。」、パウロが言うことは、もし、あなたが主の前を正しく歩むことが嫌ならこの世の人たちと同じように歩めばいい。彼らがしているように髪の毛を切ったり、頭をそることをしたらいいと。でも、それが本当に恥ずかしいと思うのなら「かぶり物を着けなさい」ということです。こうしてパウロは彼らのしていることが間違っているから、そのことに気付いて正しいことを始めるようにと願ってこのように記したのです。

C. 創造のみわざ 7-12節

7節「男がかぶり物を着るべきではありません。」と、パウロは再びこのテーマについて7節から教えようとします。7節からは「創造のみわざ」からこのことについて教えようとします。実は、7-12節まで「創造のみわざ」についてパウロは教えます。

1. 創造の順序から

どのように、どんな順序で創造されていったのかを教えるのです。

・男は神の似姿であり : 7節の続きに「男は神の似姿であり、」とあり、実際に、創世記1：26を見るとそのことが記されています。このときは地上にはまだ人が存在していなかった時のことです。神の創造のみわざが記されています。そしてこの後、神は人を造るのです。1：26aを見ると「そして神は、『われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。…』と言われました。「われわれに似るように、」と、ですから、神の似姿です。気付かれましたか？このときに神が造られたのは「男」でした。男女を造ったのではありません。最初に「男」を造ったのです。

「男は神の似姿であり、」と記されています。ということは、神が私たちのようなからだをもっておられるのか？そういうことではありません。神は霊ですから私たちのようなからだを持つことは有り得ません。では、何を言っているのか？神が持つておられるご性質のいくつかを共有することになったということです。だから、人間はそれ以外の被造物とは違うのです。どの点が違うのか？私たちには先ず「意志」があります。神は意志をお持ちです。私たちは自分の意志によって選択をします。私たちのうちには「感情」があります。「嬉しい、悲しい、苦しい」…。また、私たちは「知的」に物事を考えることができます。残念ながら、他の創造物にはそういうことはありません。また、私たちの中には「聖さ」をいただいています。ですから、生まれながらにクリスチャンであろうとなかろうと、正しくないことをしたら「それは間違っている」と私たちの良心が叫びます。私たちの心の中に聖さの基準があるからです。それを犯した場合、それは正しくない私たちに知らせてくれるのです。

また、私たちは神から「愛」をいただきました。もちろん、不完全です。しかし、愛する者として私たちは歩むことができます。一部ですが、人間はこのような神のご性質をいただいたのです。ですから、「男は神の似姿である」と教えるのです。

そして「神の栄光の現れだからです。」と続きます。この「現れだから」は日本語の訳者によって補足されています。ここで言わんとしていることは、神の栄光をこの世で示す存在として造られたということです。男は神に似る者として造られ、そして、この世にあって神の栄光を現す存在として造られたと言います。この自然界、この世の被造物は一生懸命創造主なる神の栄光を現そうとしています。でも、それよりも私たちは神の栄光を現す者として造られたということです。人間は特別です。アダムが造られた後アダムは個人的に神と交わっています。神と語ることができたのです。特別な祝福の中に入れられ、そして、特別な役割をいただいているのです。

・男性は神から特別な務めをいただいた : 創世記 1 : 26 の後半を見てください。「…そして彼らに、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地をはうすべてのものを支配させよう。」と仰せられた。」と、このような務めが男に与えられたのです。この務めはアダムにだけではなかったもので、「彼らに」と書かれています。これらのものを支配するようということなのです。ですから、男性には自然界だけでない、家庭でも、教会でも、それらをしっかり支配、治めるという責任が与えられているのです。皆さんがご覧になったように、このような責任は女性には与えられていません。この責任は男性に与えられているのです。つまり、リーダーシップはだれが取るのかということなのです。

パウロはこうして神がお造りになったこの創造の過程から、創造のみわざの順序から、大切なことを教えようとしたのです。それは先ず男性はこのような者として造られたと教えました。ですから、I コリント 11 : 7 の最後に「女は男の栄光の現れです。」とあります。「男は神の栄光の現われ」と言い、今度は「女は男の栄光の現われ」と書かれています。簡単にどういうことか言います。「男性は神の栄光を現し、そして、女性の助けをいただきながらその働きを為していく」ということです。

パウロが教えることは、神は男性をお造りになり、その男性から女性をお造りになった。なぜなら、男性にはこの働きを達成するために、女性の助けが必要だからです。それぞれには役割があるということです。繰り返しますが、どちらが偉いということではありません。異なった役割を持っているということです。ですから、男性はしっかりとリーダーシップを発揮しなさい、女性はその働きを助けていきなさいと、そのことを言うのです。

パウロは「かぶり物」ということを教会に教えました。彼らの関心は「かぶり物を着けて奉仕すべきなのか、着けないで奉仕すべきなのか、どちらなのでしょう？」と、このように彼らが質問して来たこと、また、パウロ自身がこの質問に答えているのはなぜかと言うと、コリントの町にはかぶり物を着けるという慣習が存在していたからです。人々はみなかぶり物を着けていたのです。だから、パウロは敢えて「かぶり物を着けなさい。あなたがたはそのかぶり物を取ろうとしているけれど、かぶり物が意味していることは『私は神がお立てになった権威に仕えるのです。』、だからそれを着けなさい。」と言ったのです。 =ここで終らなければならないのは心苦しいのですが、まとめて次は来週にします。

結論 パウロはどの時代でもどの地域にあっても女性がかぶり物を着けなければいけないということを行っているわけではないのです。このコリントの町ではそういうことが慣習でした。そして、ある人たちはそのかぶり物を外していたのです。そして、彼らは男性と平等だからと男性と同じようなことをしていました。そこでパウロが言うのは「違う！あなたがたには違う役割が与えられている。あなたがたは男性たちを助けるという役割です。私は喜んでその働きをしていきますと、そのことを現わすのがかぶり物だからそれを着けていなさい。」ということなのです。もっと言えば、かぶり物を着けるか着けないかよりも、問題は「その心」です。一番望ましいのは、かぶり物を着けて「私はこの権威に従うのです」とそのように歩んでいること、それならすばらしいことです。ある人はかぶり物を着けていても全然従っていないかもしれません。

パウロはかぶり物を着けるその行為だけを言ったのではないのです。パウロが伝えたかったのは「それぞれの役割をしっかりと果たしなさい」ということです。なぜなら、神はそれぞれの役割をそれぞれに与えてくれたからです。それこそが、その役割に従うことこそが神の前に正しいことであり、神を喜ばせることであり、神の栄光を現すことだと言うのです。主が与えてくださることに忠実に従っていきなさいと、そのメッセージをパウロは繰り返して人々に教え続けるのです。

今日、私たちもまた主に従うことの大切さを教えられました。先週一週間も皆さんそのことを覚えてそのように歩まれたと思います。それぞれの所であなたはすばらしい神を証されたと思います。皆さん、あなたを通して神はご自身のすばらしさを証してくださいます。でも、そのためには神のみことばに従うことです。神から教えられたことを、あなたがどう思うかではない、「神がそう言われているのだからそのように歩んでいきたい、助けてください。」と、そして、そのときにあなたは神によって用いられ、神の栄光を現し、そして、人々にとって大きな祝福になります。みことばに従うことです。主のみことばに従うことです。どうか、そのようにこの一週間も歩んでください。